

しかし、聖書には「動物には霊がない」という言明はどこにもありません。もちろん人間が動物を含めて環境を「支配」するようと言っている箇所はありますが、環境全体に対する後見人として管理を任されていると解釈することができます。英語ではこれをしばしば *guardianship* と呼びます。

さて、動物に霊（ヘブライ語で「ルーアハ」）があるかどうかについて、聖書はなんとやっているのでしょうか。今日の聖書箇所では明らかに人間と動物との間に絶対的な相違は存在しないと言っています。この知恵文学というジャンルに属する書は、キリスト教の伝統を念頭に置けば、なかなか大胆なことを宣言しているように見えます。しかも、反語形を使って、人間の霊が天へ、動物の霊が地へ行くとは決まっていなくてまで言っているのです。言い換えれば、動物の霊が天に昇り人間の霊が地に降る可能性すら想定されているのです。

このような発想は、アキナス以来の伝統的なキリスト教の教えとは矛盾しますが、日本の思想的伝統、とくにアニミスティックな発想とはかなりの程度合致する可能性があります。そもそも聖書は動物を絶対的に人間より下にある、などと主張してはいないのです。本質的な連続性を認めていると言えます。

日本の思想といっても仏教の中には「畜生」という概念があり、「畜生道に落ちる」という表現をするので、人間が動物に転生するという考え方が単なる連続性を示すだけでなく、むしろ人間の方が道徳的に圧倒的上位にあるという強い信念を示しているとも解せます。

動物倫理は宗教文化的背景と切りはなせない分野なので、当該社会における大多数の人々がどのような常識を持っているのかを知る必要があります。そして宗教文化的背景は、無意識に共有されていることが多いので、比較文化的考察によってはじめて自覚されることもあります。この機会に自分の「人と動物の関係」についての思考を省みるのもよいと思います。

【春期キリスト教教育強調週間が行われました】

先週は元本学獣医学群教授の南佳子先生がお話しくださり盛況でした。

【次回の大学礼拝】2019年6月11日（火）10時40分

北海教区幹事の小西陽祐先生（牧師）が奨励をご担当くださいます。

【前回の大学礼拝】2019年5月28日（火）10時40分

学生 390名 教職員ほか 14名 合計 404名

【大学礼拝週報 2019年度 第7号（前学期第7号）

2019年6月4日（火）午前10時40分

酪農学園大学 黒澤記念講堂

《大学礼拝》

司 式 高橋優子（キリスト教学教員）
奏 楽 佐藤理恵（野幌教会会員）
讃美指導 相原晴伴（循環農学類教員）

前 奏 「わが生命なるキリスト」（キッテル作曲）

讃美歌 讃美歌 354番（かいぬしわが主よ）

聖 書 コヘレトの言葉3章18-21節

祈 り

さん び

酪農学園大学聖歌隊

奨 励 「チャールズ・シュルツとスヌーピー」

高橋優子（獣医学類獣医倫理学研究室准教授）

報 告

讃美歌 讃美歌 541番（父み子みたまの）

後 奏 「主イエスよ、われらに」（ヴァルター作曲）

【本日の聖書】コヘレトの言葉3章18-21節

¹⁸ 人の子らに関しては、わたしはこうつぶやいた。神が人間を試されるのは、人間に、自分も動物にすぎないということを見極めさせるためだ、と。¹⁹ 人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。同じ霊をもっているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。すべては空しく、²⁰ すべてはひとつのところに行く。

すべては塵から成った。

すべては塵に帰る。

²¹ 人間の霊は上に昇り、動物の霊は地の下に降ると誰が言えよう。

【奨励者からのメッセージ】自分の宗教文化的背景を自覚する必要性

キリスト教では「人間には霊があるけれど動物にはない」と言われることがあります。正確に言うとこれは、中世ヨーロッパのトマス・アキナスがアリストテレス哲学と聖書を統合した神学を唱えて以来、ローマ・カトリックの公式見解となった考え方で、現在でも多くの西洋人はこのように考える傾向にあります。